

会津地区の歴史について

戦国期の会津と伊達政宗

戦国時代も終わりに近くなるころ、南東北では会津蘆名氏と米沢伊達氏でその覇権が争われた。口火を切ったのは伊達政宗で、家督を継いだ翌年の天正13(1584)年5月3日に会津へ侵攻、略取した。政宗は自らの軍勢を呼び寄せ5月8日には峠を越えて大塩へと進軍しようとするが「大塩の上の山」としてまで動きけれども、山中にて道一筋なれば備を立つべき地形なし。大山(を)へだてて後陣は会津を引離れれば、合戦にはおよびず…(政宗記)として会津へ引き返している。その際に会津侵攻の拠点として造られたのが小谷山城(会津城)で、政宗は同年6月28日の米沢帰陣まで在陣した。その後は家臣の後藤信康を城代とし、蘆名氏との雌雄が決する天正17年「摺上の合戦」に至るまで維持された。

小谷山城跡は現在でも遺構の残りが良く、探勝路を歩きながら虎口(出入口)や曲輪、堀切などを見ることができる。

『会津軍物語』

その頃の出来ごとを題材とした歴史物語に、『会津軍物語』がある。江戸時代享保8年(1723)書写と記載される軍記物語で、当地を舞台に、会津側から見た蘆名氏と伊達氏との戦いを描く。綿密な取材にもとづかれたと思いき地理的な記述や、なまなましい人物描写は、当時の人々を100年以上も前の戦国時代へとといざない、熱狂させたかもしれない。

江戸時代の会津宿

江戸時代の会津は、住民が木地師や荷駄運びなどで生計を立てる山間の地であり、一方で会津を代表する金銀山「会津銀山」が栄えて大いに賑わっていた(新編会津風土記:文化6(1809)年)。街道が整備され、宿駅であった会津宿には「検断」がおかれ、米沢寄りには口留番所が配されて国境の監察もおこなわれた。現在の会津歴史館は会津検断の子孫松本家の家屋を移築したものである。

会津銀山

金山集落のある山麓には、すり鉢状に掘られた穴や長い溝状の遺構を確認することができる。これらは、江戸時代に「会津銀山」と記され、明治頃まで断続的に続いた鉱山の坑道や採掘坑の跡である。盛期は慶長から承応年間(1596~1655)で、複数の鉱山があり諸国から人を集めて多くの金・銀を産出し、1000軒余りの小屋があったという(新編会津風土記)。承応年間には金掘小屋が増築される(家世美紀)がその後内部が水に浸かるなどして徐々に衰退した。

木地師の山

新編会津風土記には、会津には年貢を納めるための水田はなく、木地師、編縄づくり、旅店や荷駄運びなどで生計を立てていたと記される。木地師とは山から木を切り出し、ロクロを用いて椀や皿などの木工品を加工、製造する人々である。同書記載の家数は会津本村59、戸倉10、戸倉山3、雄子沢13、細野7軒で、会津本村以外は木地師が移り住んで成立した集落とされる。会津など会津の山間地で作られた木地は、若松などに集められ職人が漆器などを生産した。漆器づくりは藩の後押しもあり会津の一大産業となっていた。

明治21年磐梯山の噴火

明治21(1888)年7月15日、磐梯山が噴火して周囲の集落は大きな被害を受けた。477名の尊い人命が失われ、米沢街道や会津宿は土石流による河川せき止めなどで新たに形成された会津湖の底に沈んだ。人々は現在の会津地区や金山地区に移り、後には五輪塔や石塔も引き上げられ、歴史を偲ぶよすがとなっている。

現在湖面を見下ろす会津山神社(大山祇神社)は山麓にあったため水没からまぬがれた。春先の湧水期には参道の並木の樹根が現れて今も湖底に沈む会津宿の方向を示す。

磐梯朝日国立公園

噴火以降荒野となった磐梯山山麓では植林の努力が続けられ、昭和25年には、周辺一帯が磐梯朝日国立公園となった。大自然の恵みや先人たちの残した歴史は、地域の人々を支え、会津湖周辺は観光地「裏磐梯」へと変貌をとげ現在にいたっている。

会津地区へのアクセス



発行・お問い合わせ

北塩原村教育委員会

福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字下六郎屋敷2134番地

TEL.0241-23-5236

【刊行:平成30年3月30日】

北塩原村の歴史の道

米沢街道について

人々の歩みの積み重ねと地域の歴史

会津と米沢を結ぶ道については、史料の記載や遺跡の分布から、室町時代には米沢道・米沢路が存在していたことを垣間見る事ができる。戦国時代には東北を代表する名家、蘆名家と伊達家が鎬を削る歴史の舞台になった。

中世の米沢道

長禄2年(1458)とされる塔寺八幡宮長帳には「たてくちへ当所御せい七千余きにて御立候…」とあり蘆名家家臣金上氏が「たてくち」(伊達口。会津峠のことか)へ出兵したことが記される。その後明応3年(1494)、文亀3年(1503)、永正3年(1506)などにも領国をまたいだ戦闘が起きている。この頃、蘆名盛高が穴沢俊家に会津を守らせるようになったとされるが、史料(新編会津風土記・異本塔寺長帳・会津旧事雑考)に記載される年代は一致しない。

蘆名盛氏(1521~1580)の代には永禄7年(1564)、8年頃に伊達輝宗の兵が会津へ攻め込んだとされ、『仙道会津元和八年老人覚書別本』には、会津村にいた穴沢新十郎らが伊達勢を撃退したことや、冬季の雪中での戦いの様子が記されている。永禄9年、両家は盛氏の後継盛興の妻を伊達家から迎えることを約し関係が修復された。

天正6年(1578)と見られる伊達輝宗の書状には、蘆名氏への使者が大塩にいる事を記しており(伊達家文書)、大塩は当時宿場であったことがうかがわれる。会津周辺が再び不穏となるのは天正12年(1584)、蘆名家当主盛隆の死去とその後継に亀若丸が幼くして擁立された後のことである。これにより蘆名家は常陸の佐竹家寄りの姿勢を鮮明にし、伊達家との関係を悪化させる。おりしも同年、伊達家の家督を継いだのが伊達政宗であった。

伊達政宗の会津侵攻

伊達政宗は翌年の天正13年(1585)5月3日、会津峠を越えて会津領会津に侵入し、略取してしまう。

この件は後に伊達成実が記した『政宗記』によると、前日に申倉越から入田付に入った伊達家臣原田宗時が負けたことが同日には政宗の陣に伝わり、政宗が米沢から軍勢を呼び寄せている間に、会津の蘆名勢は大塩へ向かい城に籠って守りを固めたとある(「会津の人数は大塩に楯籠り、城は堅固に相抱へけり」『政宗記』)。この城は現在も発掘調査が進められている柏木城跡と考えられ、「伊達勢も同日に、大塩の上の山まで動きけれども、山中にて道一筋なれば備を立べき地形なし。大山(を)隔て後陣は會津を引離れれば、合戦にはおよびず…」(政宗記)として会津に引き返している。会津から米沢道へ越えてきた政宗軍は、大塩を眼下にしつつも、山中の狭い往来の中で陣形を取ることが出来ないとして、柏木城に籠る蘆名勢との戦闘を避けて米沢道を通り会津まで引き返したようだ。その後伊達勢の拠点となったのが小谷山(会津)城である。

上杉景勝の頃

慶長3年(1598)に会津に入った上杉景勝の重臣、直江兼続が記した書状にも「横川 中山 猪苗代 高柳 大塩 会津 つなき 関」の「町中肝煎」に対し「伝馬二匹あい調うべきものなり」(慶長(5年)八月八日直江兼続判物)と命じており、大塩と会津は道の「駅」とされていたことがわかる。

米沢街道


米沢道が「街道」として整備されたのは江戸時代のことで、慶安2年(1649)、会津藩主保科正之が江戸幕府に報告したなかで米沢への道があり、会津藩内と隣国を結び会津本街道五筋の一つであった。米沢街道は、城下会津若松を発し塩川、熊倉を経て、大塩・会津(北塩原村)、細木・関(米沢市)を通り米沢に至る14里(約56km)を結び、当時各所に整備された宿場や一里塚はところどころに今も残る。米沢側では会津路・会津街道と呼んだ。

北塩原村(北山・大塩・会津)の歴史の多くも、この往来を歩む人々の足跡が積み重なって刻まれている。今日では、歴史街道として始点と終点が見えるように、会津米沢街道と呼ぶこともある。



歴史！自然！みどころいっぱい！！ 会津米沢街道 松原歴史さんぽ

茶屋跡




街道沿い、大塩峠の茶屋跡。江戸時代の図にも記載される。昭和30年代まで営業していた。

鹿垣



米沢街道が尾根の切通しを通る場所。この辺りを鹿垣と呼んだと伝えられる。

中の七里一里塚跡



会津から七里、米沢から七里の中間に位置する一里塚。当時の一里塚ではなく、復元されたもの。

崇徳寺



永正年間の開基と伝わる。村指定文化財警子と双盤があり、江戸時代の松原の賑わいを今に伝える。

街道の松




街道沿いに江戸時代から残る松の木。現在は7本の松の木が残る。

街道の松(殿様松)




ひとときわ幹が立派な松は、「殿様松」と呼ばれている。

伝 退頭古戦場



松原を略取した伊達政宗が、大塩から会津へ進もうとするも、柏木城を前にして陣を構える場所もなく、あきらめて引き返した場所と伝えられる。

八丁壇一里塚



大塩の北にある一里塚。ここより大塩峠まで、往時の街道が残されている。

米沢街道の紅葉



街道や道路に沿って、美しい紅葉の景色を見ることができる。

伊達政宗も見た!? 旧街道からの会津盆地と柏木城跡




街道の見通しが良いところでは、会津盆地や、その手前で会津への入り口を守る柏木城跡を見渡すことができる。会津に向かった伊達政宗もこのような景色を見ていたかもしれない。

道標



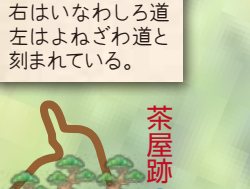
右はいなわしる道 左はよねざわ道と刻まれている。

松原五輪塔群




もとは松原宿にあり湖底に水没した五輪塔を引き上げたもの。江戸時代の銘があり、今は水没した松原宿を望むかのように並んでいる。

野鳥の森探勝路



展望台からの松原湖・磐梯山の眺めは圧巻!

松原神社の絵馬



松原地区の総鎮守。「村北山麓ニアリ、鎮座ノ始詳ナラズ、長享二年(1488)穴澤越中俊家再興セリト云」(新編会津風土記)と記載されている。以前掲げられていた絵馬は北塩原村指定文化財。湯水期になると湖底から鳥居や参道が姿を現す。

松原山神社参道



高曽根山
1443




高平山
1096



八森山
1149




戸山城跡




中世会津蘆名氏の配下であった穴澤氏の詰めの城。

松原の一本桜



松原に遅い春を告げる桜。例年5月中旬頃に開花。

領国境塚



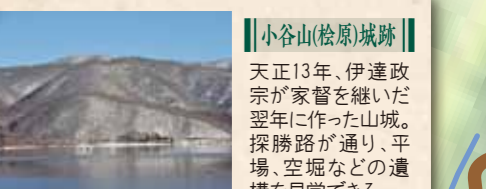
奥州(会津)と羽州(米沢)の境。峠の上に広い空間があり、塚が2基残る。

湯水期の湖底林



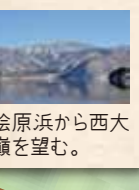
雪解けの頃、湯水期に姿を現す湖底の樹林群。明治21年、水没する前の樹根が今も残る。

小谷山(松原)城跡



天正13年、伊達政宗が家督を継いだ翌年に作った山城。探勝路が通り、平場、空堀などの遺構を見学できる。

松原浜から西大嶺を望む。



早稲沢大山祇神社



早稲沢の鎮守。毎年5月に祭礼がおこなわれる。

早稲沢木地工場資料館



松原地区の木地師の歴史をたどる。手作りの資料館。



大塩



温泉神社・道標